

伏見康治著作集

月 報
(1)

第1巻
1986・6

伏見さんについて	茅 誠司 1
伏見先生とのこと	柳瀬 隆男 3
伏見先生と私	高橋浩一郎 5

みすず書房
東京都文京区
本郷 3-17-15

伏見さんについて

茅 誠司

昭和二十七年秋は我々学術会議に選ばれた者にとって非常に重大な時期であった。

それは戦争に破れた日本がアメリカとサンフランシスコで平和条約を結んだ年である。平和条約の如何は我々研究者にとって重大な関心事であった。そのうちの一つは占領中は核分裂の研究が禁止されていたことである。ところがその平和条約においてその禁止がとけた。

その頃私は仁科芳雄先生亡き後を受けて学術会議の副会長に選ばれていた。したがってその禁止がとけた場合にお

いて学術会議が如何なる政策を取るべきかということも重要な問題であった。

丁度その年(昭和二十七年)の秋の総会の折に私も学術会議においてかねて親交のあった三村剛島(理論物理学)、伏見康治(理論物理学)、私、茅誠司(実験物理学)の三人が偶然集まって雑談しているうち上野黒門町のうきやに甘い物を食べに行ってみようということになり出かけた。有名な最中をということになり三人がたべ放題たべた。その結果三村君と私とは同じ数であったが軍配は食べっぱりのいい三村君に上がった。当時広島の理論物理学研究所長であった三村先生はいつも御自分の研究室の机の上に鉢いっぱいのおんこをおきそれをなめなめ構想をねっておられたという話の持ち主で、しかもその鉢一ぱいがその日のうちに空になるのが常だったということである。

さて、その総会の折に核分裂研究の問題については私を中心として多くの人々の賛成を得て、この案を提出しよう

という気運であったが、どういふわけか人が集まらず結局伏見君と二人の名で提案することになった。

その説明は私がした。

「原子力に関する資料を集めることからしよう」ということである。その時委員の多くの方々から色々な質問を受けたが、その中で大阪大学医学部外科の小沢凱夫教授が「茅と伏見という性格の異なる二人がどうしてこんな提案をしたのかふしぎである」という質問を受けた。その時伏見君は自分の席から卒然と立って、「私はこの問題の研究がしたいからです」ときっぱりいわれて座ってしまった。学術会議は科学者の中から選ばれた人々の会合である。したがって伏見君の答弁は我々の胸を率直についたものである。しかしその後で広島三村剛島君が立上って、広島原爆の洗礼を受けたその時の体験をくわしく説明され、一同深い感銘を受けた。そして彼は「ソ連とアメリカとの間に平和的な関係が成立するまでは原子力の研究はすべきでない」と言い、「この意味でこの案は撤回すべきである」といわれた。そして多くの方々の拍手を浴びた。けれどもこのあと我妻栄副会長が立上って「学術会議はこのような重要な問題に対して否定するだけでその職務を果たして行くべきでなく、今後如何なる態度で臨むべきかという問題に取り組むべきである」という案が取りあげられ、その委員会を作るべきであるという決議がされた。この委員会は次



左から茅誠司、小谷正雄、伏見、高良和武、西川哲治の各氏(高エネルギー物理学研究所放射光実験施設完成披露式で、1982年11月)

年度学術会議の改選までの一年間審議されて行くことになった。

それから後のことは衆知の通りで、中曾根康弘氏が原子力に関する研究費を国会に要求し、それによって原子力平和利用準備調査会が出来た。こうして原子力研究は次第に軌道にのって行った。

(日本学士院会員、元東京大学総長)